18/5/12 DIALOG(R)File 351:Derwent WPI (c) 2001 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

007916115

WPI Acc No: 1989-181227/198925

XRAM Acc No: C89-079903

Plasmid transformed with genes - used for coding pre-albumin downstream

of of yeast character expression regulating region Patent Assignee: KAGAKU OYOBI KESSEI RYOHO (KAGA ) Number of Countries: 001 Number of Patents: 002

Patent Family:

Patent No Kind Date Applicat No Kind Date Week JP 1117790 19890510 JP 87276598 19871030 198925 Α Α JP 96011074 B2 19960207 JP 87276598 19871030 Α

Priority Applications (No Type Date): JP 87276598 A 19871030

Patent Details:

Patent No Kind Lan Pg Main IPC Filing Notes

JP 1117790 A 12

JP 96011074 B2 10 C12P-021/02 Based on patent JP 1117790

Abstract (Basic): JP 1117790 A

Recombinant DNA which is a shuttle vector comprising genes both yeast and E. coli and yeast's character expression regulation region, and which is transduced with cDNA for coding human prealbumin in the lower portion of the region. The cDNA is pref. a gene for coding human normal prealbumin, specifically peptides of lst-147th amino acids, which has specific sequence. USE/ADVANTAGE - Prealbumin with amino acid at its any site transformed can be easily produced in quantity. An exemplary abnormal albumin thus produced, i.e. albumin having methionin at 30th amino acid from N-terminus instead of valine is useful to diagnosis for familial amyloido pheurobachy (FAP).

0/6

Title Terms: PLASMID; TRANSFORM; GENE; CODE; PRE; ALBUMIN; DOWNSTREAM; YEAST; CHARACTER; EXPRESS; REGULATE; REGION

Derwent Class: B04; D16

International Patent Class (Main): C12P-021/02

International Patent Class (Additional): C07K-013/00; C12N-015/00;

C12N-015/09; C12P-021/02; C12R-001-865

File Segment: CPI

# 卵日本国特許庁(JP)

の特許出願公開

#### 平1-117790 @ 公 開 特 許 公 報 (A)

Mint Cl.4

識別記号

庁内整理番号

個公開 平成1年(1989)5月10日

C 12 N 15/00 C 07 K 13/00

21/02

A-8412-4B 8318-4H C-6712-4B※審査請求 未請求 発明の数 1 (全12頁)

❷発明の名称

プレアルブミンをコードする遺伝子を組込んだ組換えプラスミドお よびこれを用いたプレアルブミンの製法

> 创特 頭 昭62-276598

願 昭62(1987)10月30日 ❷出

特許法第30条第1項適用 昭和62年8月25日発行の「生化学vol.59%8,1987(第60回日本生化学会大 会抄録号) 」に掲載し発表

明 73.

信 敬

能本県能本市武蔵ケ丘2-142

明 中 73発 渚

博

能本県能本市清水町高平402-1

砂発 明 者 上

寛

熊本県菊池郡合志町幾久富1647-151

阋 の出

能太県能太市清水町大窪668番地

財団法人化学及血清療

武

法研究所

弁理士 筒 井 知 30代理人

最終頁に続く

## 1. 発明の名称

プレアルアミンをコードする遺伝子を組込んだ 組換えブラスミドおよびこれを用いたプレアルブ ミンの製法

# 2.特許請求の範囲

- (1) 酵母の遺伝子と大脳菌の遺伝子を含み、かつ **酵母の形質発現調節領域を担うシャトルベクター** であり、 その形質発現開節領域下流にヒトのプレ アルプミンをコードするcDNAを組込んだこと を特徴とする組換えブラスミド。
- (2) 酸cDNAがヒトの正常プレアルプミンをコ ードする遺伝子である前記第(1)項記載の組換えず ラスミド.
- (3) 波cDNAがヒトの正常プレアルアミン遺伝 子から翻訳される第1番目から第147番目アミ ノ酸までのペプチドをコードする遺伝子を含む前 記事(2)項記載の組換えブラスミド。
- (4) 鎮 c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子 断片である前記第(3)項記載の組換えプラスミド。

ATG GCT TCT CAT CGT CTG CTC CTC CTC TGC CTT GCT GGA CTG GTA TTT GTG TCT GAG GCT GGC CCT ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT CTG ATG GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC AGT CCT GCC ATC AAT GTG GCC GTG CAT GTG TTC AGA AAG GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT GCC TCT GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG CAT GGG CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT TAC TGG AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT GAG CAT GCÀ GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC TCC GGC CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG CTG AGC CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC GTC ACC AAT CCC AAG GAA TGA

- (5) 鎮cDNAがヒトの正常プレアルプミン遺伝 子から翻訳される第21番目から第147番目ア ミノ酸までのペプチドをコードする遺伝子を含む 前記集(2)項記載の組換えブラスミド。
- (6) 跂cDNAが下記の遺伝子配列を含む遺伝子 断片である前記第(5)項記載の組換えブラスミド。

GGC CCT ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT
CTG ATG GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC
AGT CCT GCC ATC AAT GTG GCC GTG CAT GTG TTC
AGA AAG GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT
GCC TCT GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG
CAT GGG CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA
GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT
TAC TGG AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT
GAG CAT GCA GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC
TCC GGC CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG
CTG AGC CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC

- (7) 該 c D N A が F A P 患者が持つ異型プレアルアミンをコードする遺伝子である前記第(1)項記載の維持えブラスミド。
- (8) 該 c D N A が F A P 患者が持つ異型プレアルプミン遺伝子から類似される第 1 各目から第 1 4 7 番目アミノ酸までのペプチドをコードする遺伝子を含む前記第(7)項記載の組換えブラスミド。
- (8) 禁 c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子

断片である前記算(10)項記載の組換えプラスミド。
GGC CCT ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT
CTG ATG GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC
AGT CCT GCC ATC AAT GTG GCC ATG CAT GTG TTC
AGA AAG GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT
GCC TCT GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG
CAT GGG CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA
GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT
TAC TGG AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT
GAG CAT GCA GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC
TCC GGC CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG
CTG AGC CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACG GCT GTC

- (12) 前記第(1)項の組換えプラスミドを酵母 Sac charonyces cerevisiae に導入することにより形 質転換酵母を得、この形質転換酵母を培養するこ とを特徴とするヒトプレアルプミンの製法。
- (13) 放プレアルアミンがヒトの正常アレアルアミンである前記第(12)項記載の製法。
- (14) ほプレアルプミンがヒトの異型プレアルプミ

断片である前記葉(8)項記載の組換えプラスミド。
ATG GCT TCT CAT CGT CTG CTC CTC CTC TGC CTT
GCT GGA CTG GTA TTT GTG TCT GAG GCT GGC CCT
ACG GGC ACC GGT GAA TCC AAG TGT CCT CTG ATG
GTC AAA GTT CTA GAT GCT GTC CGA GGC AGT CCT
GCC ATC AAT GTG GCC ATG CAT GTG TTC AGA AAG
GCT GCT GAT GAC ACC TGG GAG CCA TTT GCC TCT
GGG AAA ACC AGT GAG TCT GGA GAG CTG CAT GGG
CTC ACA ACT GAG GAG GAA TTT GTA GAA GGG ATA
TAC AAA GTG GAA ATA GAC ACC AAA TCT TAC TGG
AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC CAT GAG CAT
GCA GAG GTG GTA TTC ACA GCC AAC GAC TCC GGC
CCC CGC CGC TAC ACC ATT GCC GCC CTG CTG AGC
CCC TAC TCC TAT TCC ACC ACC GCT GTC GTC ACC

(10) 波 c D N A が F A P 患者が持つ異型プレアルプミン遺伝子から翻訳される第2 1 番目から第1 4 7 番目アミノ酸までのペプチドをコードする遺伝子を含む前記第(7)項記載の組換えブラスミド。
(11) は c D N A が下記の遺伝子配列を含む遺伝子

ンである前記第(12)項記載の製法。

## 3.発明の詳細な説明

本発明は、ヒトのプレアルプミンをコードする
c D N A を組込んだ組換えブラスミド、およびこれを酔みに導入して得られた形質転換酵母によるプレアルプミンの製法に関する。 すなわち、ヒトの正常プレアルプミンを コードする c D N A 断片を大りの一に担われた形質発現調節領域(プロモーター)の下流に組込んだ組換えブラスミドを得数をつかった。 これを酵母に与えて形質転換を起こさせて形質転換を起こさせて形質を対象を増減させて産生されるプレアルプミン(正常プレアルプミンもしくは異型プレアルプミン)を得る方法に関する。

プレアルプミンは血液中に、約300μg/ml程度存在する血情蛋白のひとつであり、血中ではこれが4分子集合し分子量55,000の複合体として存在している。この複合体は甲状腺ホルモンとの結合部位を2ケ所持ち、同ホルモンの輸送に関与してい

る。 さらに、 この複合体はビタミンA 結合蛋白の結合部位を 4 ケ所持ち同ビタミンの輸送にも関与している。 その他、 プレアルブミンの詳細な機能に関してはまだ正確には解明されておらず、 今後の研究成果が期待されている。

最近、N末端より30番目のバリンがメチオニンに 変異した異型プレアルプミンが遺伝病家族性アミ ロイドニューロバチー(FAP)の病因と恐くか かわっていることが明らかにされ、そのDNAを解析 することで遺伝子は断も可能となっている。

この中で、特にFAPの網因と考えられる異型 プレアルブミンはFAP患者の血液を厚材料とせ ざるを得ず、その機能と網因との関連を解明する 上で大きな制約がある。

このような状況において、 プレアルプミン特に 異型プレアルプミンの原材料の入手における制約 を解決できる有力な手がかりとなるのは、 違伝子 組換えを応用し量度を可能にする技術の関発であ ろう。 しかしながら、 これまでに遺伝子組換え等 の技術を用いてプレアルプミンもしくは異型プレ

すなわち、本発明は、プレアルプミン選伝子を 組込んだ新規な組換えブラスミド、それによる形 質転換酵母および酸酵母によるプレアルプミンの 生産方法を提供するものである。また、本発明は これまでヒト血液がらの分離が難しく、 試料の入 手に問題があった異型プレアルプミンに関しても これを展界なく大量に供給することを可能にする ものである。

アルプミンの発現を**はみたような報告はまだ見**あたらず、勿論発現に成功した報告もない。

このような事情のもとに、本発明者らは、先に 鰓本大学医学部の前田らがクローニングに成功し たヒト由来のプレアルプミン遺伝子、異型プレア ルプミン遺伝子 (Mita et al, Biochem. Biophys. Res. Commun. 124, 558-584 1984)を用い、最初 に大協園を宿主としてアレアルアミンの発現をは みた。 しかしながらその結果としては、 好ましい 成果は得られず、大器菌を宿主とした発現の試み は失敗に持った。その後さらに本発明者らは酵母 を宿主として用いたプレアルプミンの量産につい て検討を重ねた結果、酵母の遺伝子と大腸菌の遺 伝子とを含みかつ酵母のプロモーターの制御下に プレアルプミン遺伝子を組込んだ新しい組換えり NAを餌製し、それによって酵母を形質転換させ、 かかる形質転換酵母を用いてヒト由来のプレアル プミンと同じ分子量、 免疫学的性質を有するブレ アルプミンを量産させることに成功し、本発明を 完成するに至った。

本発明の完成によって、in vitroで人為的に任意の部位のアミノ酸を変異させたプレアルブミンが容易にかつ量的に入手し得る手段が解決されたもので、本新技術はきわめて興味ある知見を今後生み出す可能性を提供するものである。

本技術は、ヒト血液を原材料とせず、ヒトプレフルブミンを容易に入手し得る手段も同時に与えるものであり、今後の数後の医薬品化においったでヒト血液から精製した場合のようにヒト血液に由来する未知の感染性因子の混んを考してルブミン製剤を供給することを可能してある。さらには、試料の人手に関してもがあった、異型ブレアルブミンについても、本発明によりその制的が解決され、これを容易によりがあった、異型ブレアルブミンについても、本発明に提供することが可能となり、今後のFAPに関する研究に大きく興献するものと考える。

以下に本発明の組換えブラスミド、形質転換除 母、およびそれによるブレアルブミンの生産につ いてさらに詳細に説明する。

## (1) プレアルプミン遺伝子

本発明で用いられるプレアルブミンをコードする c D N A は、 ヒトの肝臓より調製した oRNAを出発材料として、 常法に従い逆転写酵素により二本鎖 c D N A を合成し、これを大腸菌によりクローニングしたものである。 クローニングされたプレアルブミン遺伝子はプレアルブミン遺伝子はプレアルブミン遺伝子はプレアルブミン遺伝子はアレアルブミン遺伝子はアレアルブミン遺伝子はアレアルブミン遺伝子はアレアルブミン遺伝子はアレアルブミン遺伝子はアレアルブミン

本発明において調製されたプレアルプミン cDNA は、 669 塩基対からなり、 アミノ酸をコードする領 域の完全な配列を含む。 さらに、 プレアルプミン cDNAは5'-非自訳領域に26、3'-非自訳領域に181の 塩基対を含む。

第1回の制限酵素図および第2図に示す塩基配列を有するDNA断片が大腸菌プラスミド Okayama-BeryベクターにオリゴdG、dC法により挿入されたものを、通常はPstl-Pyullで処理してプレアルプミン遺伝子断片を得、後述のプラスミド機質に供する。必要に応じ、成熟プレアルプミンを直接組

レアルプミンの遺伝子は、正常プレアルプミン遺伝子を用い、 この遺伝子にポイントミューテーションを起こさせ必要な箇所のみ塩基を変換することによっても異製することができる。

## (2) シャトルペクター

本発明で用いられるシャトルベクターは、 酵母の遺伝子と大腸菌の遺伝子とを含みかつ酵母の形質免現調節領域を担ったプラスミドベクターである。

この酵母の遺伝子としては、一般に、プラスミドが酵母中で染色体と独立して増殖するのに必要なDNA配列、例えば酵母染色体の複製に必要なDNA配列(2μori)があり、所望により、さらに形質転換酵母の遺択マーカーとなる遺伝子が含まれる。この遺択マーカーとしては、ロイシン産生遺伝子、ビスチソン産生遺伝子、トリプトファン産生遺伝子、ビスチソン産生遺伝子、アデニン産生遺伝子などが含まれ、これらの1種または2種以上が用いられる。

大腸菌側の遺伝子としては大腸菌体内において 🦈

投え酵母に発現させるために、翻訳される第1番目から20番目までのアミノ酸、すなわちシグナルペプチドの部分をコードする遺伝子を予め除去しておくこともできる。この場合には、同始コドンのATGも同時に除去されるため、後に述べるシャトルベクターにプレアルプミン遺伝子を組み込む際に同始コドンとなるATGを付け加える工夫が必要となる。

なお、本発明で述べるアレアルプミン遺伝子は、 第2回に示す塩基配列を有するものに限定される ものではない。

また、異型プレアルプミンをコードする遺伝子も、PAP患者の肝臓より関数した mRNAより同様にして異型プレアルプミンをコードする cDNAを調製することができる。このようにして得られた異型プレアルプミン遺伝子は、正常のプレアルプミン遺伝子配列と比較して、1 塩基の違いしかなく、プレアルプミン遺伝子の関訳開始コドンを+1とした場合に第149番目(+148)のシトシンがアデニンに変異しているだけである。また、異型プ

プラスミドが増殖するために必要なDNA配列、例えばCo1E1系のプラスミドの複製起点のDNA配列(ori)を有し、好ましくはさらに形質転換大陽菌の選択マーカーとなる遠伝子を含む。この選択マーカーの遺伝子としてはアンピシリン耐性遺伝子、カナマイシン耐性遺伝子、テトラサイクリン耐性遺伝子、クロラムフェニコール耐性遺伝子などが挙げられ、これらの遺伝子の1種または2種以上が用いられる。このような大膳官DNAとしてアンピシリン耐性遺伝子とテトラサイクリン耐性遺伝子を有するの88322が一般に汎用されている。

組換え酵母によりプレアルブミンを変生させる ために必要な形質免現側節領域(プロモーター) には酵母由来のものが用いられる。 好まししい ゼ モーターの例としては、 酸性フォスファターゼブ ロモーターやグルタルアルデハイドデヒドロゲナ ーゼブロモーターのように本来酵母に必要なれる。 具体的な一例として酵母の抑制性酸性ホスファタ ーゼプロモーターが挙げられるが、 酸性ホスファ ターゼプロモーターは退常ホスファターゼを構成する60,000ダルトンのポリペプチド (p60) のプロモーターであり、そのプロモーター活性もかなり送力で、且つ培地中のリン酸濃度をコントロールすることによってプロモーター活性を制御できることに大きなメリットがある。

このようなシャトルベクターの代表的な例は、本発明者らにより調製された。 酵母剤の遺伝子としてars1、2μoriおよびロイシン耐性遺伝子(Leu2)を有する酵母DNAと大腸菌プラスミドpBR322とを組み合わせたシャトルベクターPAM82(特別昭58-36699)であり、これはつぎのようにして機築される。

酵母 S 288 G D NAバンクより得られた抑制性酸性ホスファターゼを構成する60,000ダルトンのポリペプチド (p60) の遺伝子を含む約8000塩基対 (8Kb)の制限酵素 E coR I 断片 [PNAS, 77巻、6541~6545頁、(1980)および PNAS, 79巻、2157~2161頁、(1982)を参照】を公知の大腸菌ブラスミド pBR322 [Sutcliffe, J. G., Cold Spring Harbor Symposiu

arsl-Trplを含む断片は、そのTrpl遺伝子内に制限 酵素Hind皿の認識部位を1個所有する。

上記pAT28のHind四部位に酵母のロイシン産生遺伝子(Leu2)と2μmDNAの複製に必要なDNA配列(2μori)を含むHind四断片(Tohe, A., Guerry, P., Vichener, R.B.; J. Bachteriot, 141, 413~416, 1980を参照)を挿入する。このようにして得られるプラスミドがシャトルベクターpAT77(特別昭59-38689を参照)である。

このpAT77は、大腸菌の遺伝子としてpBR322のアンピシリン耐性遺伝子(Apr)を含むEcoRI部位からSalI部位までを有し、一方酵母の遺伝子として、pBR322と結合したEcoRI部位よりarsi、2μori、Leu2遺伝子の瞬に位置し、さらにそのつぎに酸性ホスファターゼ遺伝子の上流からSalI部位までを有する。そしてそのEcoRIおよびSalI部位でごれら大腸菌遺伝子と酵母遺伝子が結合した構造となっている。このpAT77は大腸菌内においてはpBR322の複製起点DNA配列(ori)により増殖し、また酵母内においてはarsiおよび2μoriにより増殖可能と

m.43 巻、77~90頁、(1979)を参照】のEcoRI部位に挿入して得られるプラスミドを出発材料とする。なおこの8 Kb D H A 断片は制限酵素 SalIの認識部位を約2.8 Kb 包がp B R 32 2のアンピシリン耐性遺伝子側になるように挿入されている。

このブラスミドを制限政策Sallで切断し、さらにT4DHAリガーゼにより再アニールさせてpBR322のSall部位から酸性ホスファターゼ遠伝子断片の5.2Kb側を失ったブラスミドを得、これをpAT25と称する。このpAT25はpBR322のアンピシリン耐性遺伝子を含むEcoRl部位からSall部位までの約3.7Kbの断片と酵母の酸性ホスファターゼ遺伝子のEcoRl部位からSall部位までの約2.8Kbの断片がそれぞれ対応する末端同志で結合したブラスミドである。つぎに、上記pAT25のEcoRl部位に、酵母の112世紀子を含む1.4KbのEcoRl新片【Pro、NAS,78巻、1035~1039頁、(1979)を参照】を挿入する。得られたブラスミドをpAT28と称する。なおこの

なる。 さらにこのブラスミドは、 選択マーカーとしてアンピシリン耐性遺伝子 (Ap') およびロイシン産生遺伝子 (Leu2) を有しており、 大腸菌、 酵母菌のいずれの細胞内でも増殖でき、 シャトルベクターとしての条件を充分に満たしている。

なお、このシャトルベクターを用いるのは、後 記載換えブラスミドを大腸菌を用いて調製するた めであり、 該組換えブラスミドで酵母を形質転換 する段階に至っては、 大腸菌の遺伝子は除去され ても問題はない。

このようなシャトルベクターpAT77 を制限段素 Sallで処理して開製させ、 ついでこれをエキソヌクレアーゼBAL31で処理することにより酸性ホスファターゼ構造遺伝子の一部または全部と、 所望によりさらにその上彼の種々の部分まで除去する。 この除去は酸性ホスファターゼ構造遺伝子の上彼 -50bpの前までの適当な部位まで行われ、 エキソヌクレアーゼ処理条件により適宜関節される。

上記のようにして酸性ホスファターゼ構造遺伝 子全部もしくはさらにその上流部分を除去したの ち、この部位に合成または天然のリンカー、例えばSallリンカーまたはXholリンカーを組込み再び環状プラスミドに戻すことにより、酸性ホスファターゼプロモーターの制御下に外来性遺伝子を純粋な形で発現させ得るシャトルベクターが得られる。このようにして酸性フォスファターゼ構造遺伝子の上流・33bpまで除去したシャトルベクターが、pAH82である。

このシャトルベクターは、通常の制限酵素SallまたはXholで処理することにより容易にその組込み部位を開製させることができるため、所望の遺伝子を組込むのに好遺である。このようなシャトルベクターpAH82に関しては本発明者らにより特関昭59-386998として特許出願されており、なお、このpAH82をサッカロミセス・セレビシェAH22に組込んだもの(サッカロミセス・セレビシェAH22/pAH82)は微工研条等第313号として容託されている。
(3) プレアルブミン遺伝子発現プラスミドの複数本発明の組換えブラスミド、すなわちブレアルブミン遺伝子を組込んだプラスミドの質製は、ま

こさせる。 このように処理された酵母をベクター 上に担われている宿主酵母の変異を相補する遺伝 子、 例えばロイシン産生遺伝子の免現を指標とし て形質転換酵母を適択し、分離する。

なお、 静母としてはロイシン要求性変異株のほかに、 ヒスチジン要求性変異株、 トリプトファン要求性変異株、 ウラシル要求性変異株、 アデニン要求性変異株などが挙げられる。

(5) 形質転換酵母の培養およびプレアルプミンの 生産

上記の方法で得られた形質転換的母を培養ししてのフレアルプミンを得る。 この場合、 用いたがのロモーターに応じて培養条件を工夫するここを研えている。 酸性ホスファターゼブロモーターを使用した場合には、 得られた形質を投資をした 対数増殖にある 関係をリンとを でいる 対数増殖にある アクーゼ がかけい ない条件下に培養する。 培養後、 ションルペプチャルペプチャ

ず前記シャトルベクターを使用したリンカーに対応する制限酵素、例えばSallまたはXholにて処理して関類させ、これに上記プレアルブミンDNAを作用させて連結させる。これを大脳菌にて増幅し、各種制限酵素分析によって正しい配位に超込まれたもののみを選択し、目的とする組換えブラスミドを得る。

#### (4)酵母の形質転換

形質転換されるべき昨母としては、プラスミドで担われた形質転換番母の選択マーカー遺伝子によって相補される変異を持った変異株、例えばロイシン要求性変異株であるサッカロミセス・セレビシェ(Saccharomyces cerevisiae) AH22 ( a leu2 his4 Can1 (Cir\*)]、サッカロミセス・セレビシェ(Saccharomyces cerevisiae) AH22 pho80 ( a leu2 his4 Can1 (Cir\*) pho80] などを用いる。上記超換えプラスミドを大願菌にて増殖させたのち、独酵母変異株に常法により作用させ、例えばスフェロプラスト化したのちカルシウム処理した菌体とプラスミドDNAを複合して形質転換を起

子を用いた場合には簡体内に、またシグナルペプチド領域を含む全プレアルブミン遺伝子を用いた場合には、その培養液中および面体譲渡面に分泌されたプレアルブミンが多量に集積される。 なお、用いる酵母の問題により、例えば Pho80変異株を用いた場合には、酸性ホスファターゼブロモーターを抑制しない条件をとくに採用する必要はなく、 20 形質転換酵母を直接培養して所望のプレアルブミンを大量に産生させることができる。

上記方法で得られるプレアルアミンは免疫学的にヒトの血中に存在するものと区別し難く、また、プレアルアミンが培地中に分泌、放出されることから、 脅母における蛋白質分泌研究のモデルとしても有用である。

つぎに実施例を挙げて本発明をさらに具体的に
型明する。

## 実施例1: アレアルブミンの負現

- (1)プレアルアミン遺伝子の興製
- (I)mRNAの特盤
- ヒト肝腱は手術時に摘出し、液体窒素中にて直

ちに渡結し、これを用いて、チャーウィンら (Chirguin et al, Biochemistry, 24 5294-5299, 1979) の方法に従って、mRNAを調製した。

(II)cDNAの合成および大脳菌HB101の形質転換と ト肝臓より得た mRNAをもとに Okayama-Berg法( Okayama, B. and Berg, P., Mol. Cell Biol. 2, 161-170, 1982) により、cDNAを含むプラスミド を作組し、これを大脳菌HB101に形質転換し、cDNA ライプラリーを開観した。

#### (III)プレアルプミンcDNAの何定

Kandaら (Kanda, Y. et al, J. Biol. Chem., 249, 6796-6805, 1974) によって明らかにされているプレアルプミンのアミノ酸配列をもとに Asp \*\*-Gin\*\*に相当する部分の合成 DNA16種を合成し、これをValiaceら (Vallace, R.B. et al, Nuclei c Acids Res., 6, 3543-3557, 1979) の方法により (r-\*\*P) ATPでラベルし、これをプロープとしてcDNAライブラリーのスクリーニングを行い、プレアルプミン遺伝子を含む大腸菌を退び出した。

姑合したブラスミドである)を得る。

(IV)プラスミド DNAの原盤

つぎに、このpAT25のEcoRI部位に、プラスミドYRP7をEcoRI処理することによって得られるarslおよびTrpl遠伝子を含む1.4KbのEcoRI断片を挿入してプラスミドPAT26を得る(このars1-Trplを含む断片は、そのTrpl遠伝子内に制限酵素Hind皿の・認識部位を1固有する)。

上記 pAT28の Hind III に、プラスミド pSLE1を Hind III で処理して 得られる酵母の Leu2 および 2 μ or i を含む Hind III 断片を挿入してシャトルベクター pAT77を 得る。この pAT77をサッカロミセス・セレビシェ AH22に 組込んだもの(サッカロミセス・セレビシェ AH22/pAT77)は微工研条音第 324号として寄託されている。

上記の方法で得られたpAT77 (1μ8)をSallで開製したのち、20mNトリスーHCI(pH8.2)、 12mM CaCle、12mM HgCle、0.2M NaCl、1mM EDTA溶液50μl中で0.1UのエキソヌクレアーゼBAL31を30秒~1分間作用させる。 ついでフェノール抽出、エタノール沈潔を行ったのち、Xholリンカー1pmolとT4

プレアルアミン遺伝子を含む大腸簡より松原ら
(Matsubara et al, J. Virol., 16, 478-485,
1875) の方法によりプラスミドを調製した。
このプラスミドはOkayawa-Bergペクターにプレア
ルプミンをコードする全領域のcDNAがクローニン
グされたものであり、これをpPA1とした。

#### (2) シャトルベクターpAM82の四製

辞母 S288GDNAバンクより得られた抑制性酸性ホスファターゼを構成する80000ダルトンのボリペブチド (p60) の遺伝子を含む約8000塩基対 (8Kb) の制限酵素 EcoR I 断片を大腸菌プラスミド p8R322の EcoR I 部位に挿入して得られるプラスミドを出発材料とし、これを制限酵素 Sal I で切断し、さらに T4DNAリガーゼにより再アニールさせて pBR322の Sal I 部位から酸性ホスファターゼ遺伝子断片の 5.2Kb 倒を失ったプラスミド pAT25 (これは pBR322のアンビシリン耐性遺伝子を含む EcoR I 部位から Sal I 部位までの約3.7Kbの断片と酵母菌の酸性ホスファターゼ遺伝子のEcoR I 部位から Sal I 部位までの約2.8Kbの断片がそれぞれ対応する宋増周士で

DNAリガーゼの反応条件下で12時間結合を行う。この反応溶液で大脳菌×1778を形質転換し、得られたアンピシリン耐性の形質転換体よりプラスミドDNAを調製し、各DNAについてマキサムーギルバートの方法(Haxan, A。& Gilbert, V.; Pro. N.A.S.,74,560~584を参照)に従い、塩基配列を調べ、BAL31処理により除去された酸性ホスファターゼ遺伝子領域を決定する。これら中からホスファターゼ境遺伝子領域が完全に除去されたプラスミドPAM82(第3回)を得る。

ホスファターゼ構造遺伝子の皮物p80の最初のアミノ酸であるメチオニンをコードするコドンATGのAを+1として、pAM82は-33まで除去されたものである。 なお、このpAM82をサッカロミセス・セレビシェAH22に組込んだもの(サッカロミセス・セレビシェAH22/pAM82)は微工研条容第313号として容託されている。

(3)プレアルプミン遺伝子免現プラスミド (pNPAI)の四句

プレアルプミンをコードする全領域(第1図参

照)を含むDNA断片が挿入されているブラスミド pPAI(3μg)を制限政策Haem、 XbaI で切断処理し、83-108番目の46bpよりなるDNA断片を精製し、これに、EcoRI の切断端を持つ合成DNAを結合し、これをさらに、EcoRI、 XbaI で切断処理したブラスミド pUC18のEcoRI・XbaI サイドに挿入した。ついで、このブラスミドをXbaI、 Hinc II 切断処理して 存た5706bpの DNA断片を挿入した。このようにして 存た5706bpの DNA断片を挿入した。このようにして 存たブラスミドは、 ブレアルブミンのシグナル領域が除去され、 さらに appai は コドンとして ATGが、 即ちN末端メチオニンが付加された ブレアルブミン cDNAを持ったことになる。つぎに、 このブラスミドを EcoRI・Hind III で 切断処理して ブレアルブミンの cDN A部分を切り出し、これに XhoI I リンカーを結合した。

このようにして末端がXhoI切断末端となったプレアルブミン遺伝子断片を得た。このONA断片とXhoIで開製されたシャトルベクターpAH82を、分子比5:1で混ぜT4DNAにより結合させた後、この反

スフェロブラスト化する。 ついで、 スフェロブラ ストを1.2Hソルビドール宿被で3回洗浄したのち、 2Mソルピトール、10mMCaClzおよび 10mMトリスー HCI (pH7.5) の溶液0.6mlに懸濁させ、 その60μl せつを小は駄笠に分けする。 これに前記(3)で両型 した組換えブラスミドpNPAI溶液30μlを加え、充 分提合し、 さらに 0.1MCaCla(3 μ l) 加えて 最終額度 10mHCaCleとし、 宮福に5~10分同放置する。 つい でこれに、20%ポリエチレングリコール4000、10% MCaClzおよび10mMトリスーHCI(pH7.5)溶液1mlずつ を加えて混合し、 宜温に約20分間放置する。 この 混合液0.2mlずつを45℃に保温された再生培地( 22%ソルビトール、2%グルコース、0.7%イーストニ トロゲンベースアミノ酸、 2%YPD、20μg/mlヒスチ ジン、 3% 寒天 ) 10 m l に加え、 軽く混合させ、 予め 進備された1.2Hソルビトール含有最小培地(0.7% ィーストニトロゲンベースアミノ酸、 2%グルコー ス、 20μg/mlヒスチジン、 2% 东 天 ) プレートに重 磨し、 固化させたのち、 30℃で培養してロイシン 非要求性酵母のコロニーを得る。 このコロニーを

応被で大陽朝H8101を形質転換した。得られたアンピシリン制性の形質転換体よりプラスミド DNAを調製し、それらについて、 EcoR I、 Xba I、 Xho I で分析することにより、 ベクターへのプレアルプミン遺伝子の組込みおよびその方向を確認した。 選び出されたプラスミドはベクターのホスファターゼブロモーターの下流にプレアルプミン遺伝子が正しい向きに挿入されたものであり、これをプレアルプミン遺伝子免現プラスミド PNPA1と称する。プレアルプミン遺伝子免現プラスミドの構築の流れを示したものを第4回に示した。

## (4)形質転換酵母の調製

野母としてサッカロミセス・セレビシエAH22[a leu2 his4 Canl (Cir\*)] (微工研条容第312号)を用い、これをYPD培地(2%ポリペプトン、12イーストエキス、2%グルコース)100mlに接種し、30℃で一晩培養したのち、遠心して集留する。減固水20mlにて菌体を洗浄し、ついで1.2Hソルビトールおよび100μg/mlテモリアーゼ60,000(生化学工業製)の溶液5mlに懸濁させ、30℃で約30分間保ち、

20μ8/mlヒスチジンを含むパルクホルダーミニマルメディウム (Tohe, A. et al; J. Bachterol., 113, 727~738(1973)を参照) にて培養して形質転換数母サッカロミセス・セレビシェpNPA1を得る。
(5)形質転換数母によるプレアルプミンの製法

前記(4)で得られた形質転換酵母の各コロニーをさらに20μg/milヒスチジンを含むパルクホルダーミニマルメディウムの寒天ブレート上に塗布し、30℃にて培養してコロニーを形成させる(ロイシン非要求性となった形質転換体の再確認のため)ついでこのコロニーから関体を分離し、20μg/milヒスチジンを含むパルクホルダーミニマルディウム10miに接種し、30℃にて培養を行う。約24時間後、対数増殖期にある菌体を遠心して集菌し、20世紀を含まれるKHaPOをKC1で選換し、さらに20μg/milヒスチジンを加えたもの)10miに放生された10°celis/miになるように懸傷のは、30℃にて培養を続けた。このようにして酵母菌体内に産生されたブレアルブミンを得た。

リン酸温度を低下させ、 プロモーター活性を誘う 導する前後でのプレアルプミンの酵素免疫測定に よる測定値を後記実施例2の第1表中に示した。

## 実施例2: 異型プレアルアミンの発現

## (1)異型プレアルアミン遺伝子の欝製

FAP患者の肝臓を手術時に摘出し、実施例1の場合と同様にして異型プレアルプミンをコードするcDNAを開製し、これをOkayama-Bergベクターにクローニングし、これをアラスミドpPA3とした。(2)異型プレアルアミン遺伝子発現プラスミド (pHPA1) の開製

この異型プレアルアミンをコードする全領域を 含む DNA断片が挿入されているプラスミド pPA3( 3μg)を用い、実施例 1 と同様にしてシャトルベ クター pAM82の酸性ホスファターゼプロモーター下 流に異型プレアルアミン遠伝子が組み込まれてい る免現プラスミド pMPA1を得た。

(3)形質転換器母による異型プレアルプミンの製法 前記のプラスミドpMPA1を実施例 1 と同様に静母 サッカロミセス・セレビジェAH22に導入し、形質

図)。 さらに、 ウェスタンプロットの結果からも、 防母産生正常プレアルプミンはヒト 血液由来プレ アルプミンと同一の分子量を有していることが確認された。 (第6図、レーン 1:ヒト 血損由来プレ アルプミン、レーン 2:正常プレアルプミン発現 母面体破砕液、レーン 3:異型プレアルプミン産生 酸母面体破砕液、レーン 4:陸性コントロール用宿 主限母菌体破砕液)

また、実施例2における異型プレアルプミンも 同様にFAP患者血液由来の異型プレアルプミン と免疫学的に同一であることが判明した。 (第5 図、第6 図参照)

# 4.図の簡単な説明

第1回は、プレアルプミン選伝子の制限酵素切断地図、第2回はプレアルプミン遺伝子の塩基配列とこれから予想されるアミノ酸配列を示す。

第3回は、シャトルベクターpAM82のブラスミド図を示す。

第4回はプレアルプミン遺伝子発現プラスミド の複数図を示す。 転換酵母を得、これを同様に培養した。 第1 表に リン酸濃度を低下させ、 プロモーター活性を導入 する前後での異型プレアルブミンの酵素免疫制定 の結果を示した。

第 1 表

アラスミド	プレアルブミン産生量(μg/al)	
	誘導的	拼導後
pNPA1	0	5.3
pMPA1	0	2.1

## 実施例3: 産生されたプレアルプミンの解析

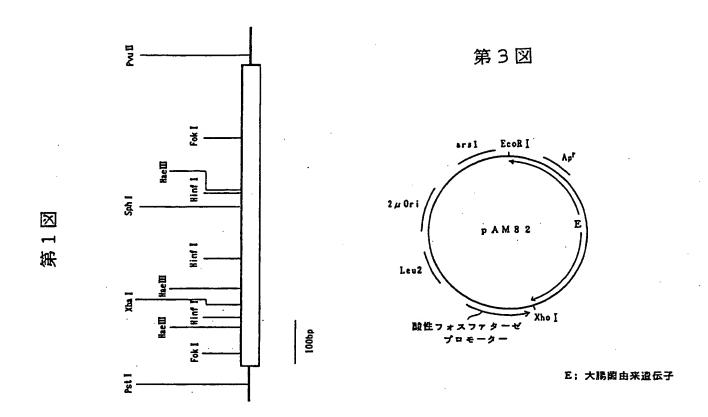
前記実施例 1 および実施例 2 により得られたアレアルプミン (正常) および異型プレアルプミンの免疫学的性状をヒト血液由来のプレアルプミンのそれと比較することにより調べた。

その結果、正常プレアルブミンを産生している 酵母質を破砕して得られる租抽出液の酵素免疫激 定における反応性は、ヒト血液由来のプレアルブ ミンのそれと同一であることが確認された(第5

第5 図は酵母産生正常プレアルプミン、 異型プレアルプミンおよびヒト血液由来プレアルプミンの酵素免疫測定における反応性を示す。

第6 図はヒト血液由来プレアルプミン(レーン
1)、 酵母産生正常プレアルプミン(レーン 2)、 酵母産生異型プレアルプミン(レーン 3) および 宿主酵母 値粗 抽出液(レーン 4) のウェスタンプ ロット像を示す。

**AAAAAAAAA** 

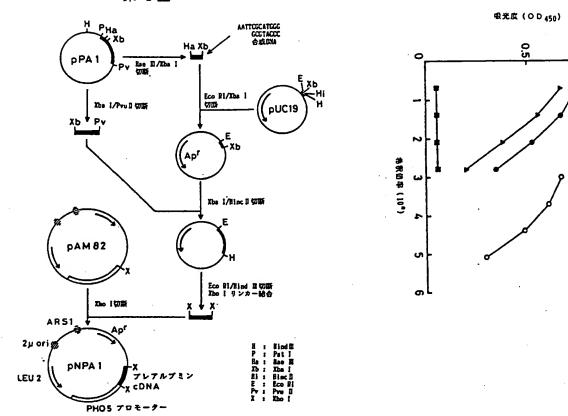


Gly Glu Ser GGT GAA TCC Ala GCT CAG GAG CTGTTTTCACCTCATATGCTATGTTAGAAGTCCAGGCAGAGACAATAAAACATTC A12 GCT Glu Glu Glu Phe Asp Thr Lys Ser Tyr GAC ACC AAA TCT TAC AC SS Lys Glu \*\*\*
AAG GAA TGAGGGACTTCTCCTCCAGTGGACCTG ACAGAAGTCCACTCATTCTTGGCAGG 950 Ser AGT a a gga cga gga a tgta tgta a ccaa ga gta t cca ttta cta a a c A1a GCA TYC Val Arg Arg Lys Tr ACG Ala Gly GCT GGA Acc His Glu His / Lys Tyr Ser Tyr Ser Thr TAC TCC TAT TCC ACC Leu Asp Ala V G13 GGG Ser Gly Pro Arg TCC GGC CCC CGC Leu Pro Thr Gly Thr Phe TTC Leu Leu Cys 1 CTC CTC TGC ( Ala Ser GCC TCT Va.1 GTG ACT TO His CAT GIU GIY IIE TYF LYS WAI GIU IIE GAA GGG ATA TAC AAA GTG GAA ATA Lys Ala Leu Gly 11e Ser Pro Phe AAG GCA CTT GGC ATC TCC CCA TTC TP YO 27 Val Leu Val GTG žΕ ASH ASP S Ser Pro 7 Glu Pro His Gly CAT GGG Val Ala GTG GCC Val Lys GTC AAA Met Ala Ser His Arg Leu Leu ATG GCT TCT CAT CGT CTG CTC Ser Glu Ala Gly TCT GAG GCT GGC 紙 Asn Pro AAT CCC Me t ATG Leu Val Phe Thr Ala GTA TTC ACA GCC Leu CTG As n AAT 7rp 766 Gly Glu 1 GGA GAG ( Leu CTG Lea 12 SS 11e ATC Val Thr GTC ACC Ala GCC Phe Val Pro CCT Ala GCC As P GAC A1a 600 Asp Cys TGT Ser Pro Val GTA Va.1 GTG lle ATT Val GTC Trp TGG 9Y9 Val GTA Lys Ser Ala GCT

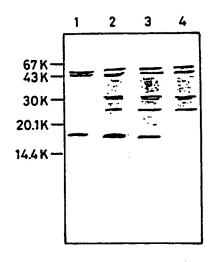
○ とト食績● 正常アレアルブミン島全部母国報輸出液● 異型アレアルブミン島全部母園報告出版■ 商主費母園報告出版

終5図

第4図



第6図



第1頁の続き

@Int.Cl.4

識別記号

庁内整理番号

//(C 12 N 15/00 C 12 R 1:865) (C 12 P 21/02 C 12 R 1:865)

砂発 明 者 濱 田 福 三 郎 熊本県菊池郡西合志町須屋2679−2